

本当は怖い小学一年生

初瀬基樹

『本当は怖い小学一年生』というのは、つい最近、ポプラ社から出版された本のタイトルです。著者は、白梅学園大学学長、東京大学名誉教授の汐見稔幸先生です。（わが園にも数回来て頂いたことがある先生です。）

授業が始まって、おしゃべりをやめず、「静かにしなさい」と注意しても聞く耳を持たない子ども、ときには「うるせえーよ、バーカ」「おまえなんか死んじまえ」と暴言を吐く子ども、授業中だというのに勝手に立ち歩く子どもなどなど。十数年前から小学校入学直後の1年生のこうした状況は「小1プロブレム」と呼ばれています。（ここ、河内ではそうした姿は聞かないので無いと思いますが…）

これに対し、マスコミや学校関係者は「家庭でのしつけができていない」「幼稚園や保育所が子どもに我慢することや集団的な規律を学ばせていない」のが原因だと、家庭や就学前教育に問題があるように言うことがあります。果たしてそうなのでしょうか？

汐見先生は「これは、教室のイスに座ってられない子どもたちの問題ではなく、旧来の学びスタイル（教室のイスに座って、みんなが一斉に授業を受けるというスタイル）を今世紀になっても続けていることから起こる問題ではないか？本当に深刻なのは、子どもの可能性を閉ざしている大人社会なのではないか？」と訴えておられます。

親のスマホを幼児までもが使うようになってきているなど、現代はあらゆる情報が容易に手に入る世の中になっており、もはや、学校から得る知識は、子どもたちにとって多くの情報のなかの一つでしかない。しかも、その情報伝達の方法は、昔ながらの方法であり、「知識の習得」を目的としている今の学校の学びの在り方では、もはや子どもたちは「学びのおもしろさ」を感じられなくなっているのではないかな。

現状のような「苦手科目の克服」ばかりではなく、もっと、子どもたち自身の「知りたい」、「調べたい」という興味、関心を大切にすべきである。そして、子どもたち自身が「なんのための勉強か？」が分かって納得できるようにすべきだ。とも仰っておられます。

例えば、小学校の教科のど真ん中に家庭科を持ってくる。そうすると農業、生物、歴史から、栄養学、保健的知識、そして医学へもつながっていく。それらを学ぶうちに人が生きていくために最低限必要な基礎情報を身につけることができる。さらに、こうした情報を覚えていくためには計算ができなければならないし、ベースとしての読み書きもやらなければならない。こうなると初めて、何のために勉強をするのかが一本につながってくる。

手間ひまをかけていいものをつくることの面白さや喜びを体験すれば、子どもたちはもっと真剣になっていき、学ぶ楽しさを味わっていくことだろう…と。

自分で「したい！」と思うことなら、どれだけでもがんばれるけど、人に言われてさせられることは苦痛でしかありません。実際、私自身も大人になって就職し、保育という仕事におもしろさを見つけてからの勉強は、苦になるどころか、楽しいし、「もっともっと学びたい」と思うようにもなりました。

汐見先生の言うように、「どんな人間を育て、どんな社会にしていきたいのか？」を私たち自身が真剣に考え、発信していかなければならない時代になってきているのかもしれない。

